

# 米国の組み込み展示会ではPDAが大活躍、 日本のケータイはこれからが本番

村上晋一郎



2001年4月9日～13日、米国カリフォルニア州San FranciscoのMoscone Centerにおいて、組み込みシステム設計に関する展示会「Embedded Systems Conference San Francisco」が開催された。米国ではPalmなどのPDAがビジネス・ツールとして受け入れられている。Embedded Systems Conference San Franciscoの会場でもPDAを利用した展示やプレゼンテーションが目立った。一方、日本で普及している携帯電話については評判はいま一歩。しかし、将来的には、携帯電話も米国市場に受け入れられるだろう、と筆者はみている。

(編集部)

日本の3倍はあるかと思える広い歩道。路上に違法駐車しているベンツ。鶏を頭に載せ、街頭に座り込みじっとなにかを待っている男。携帯電話で忙しそうに商談を取り交わすビジネスマン。San Franciscoはたくさんの顔をもつ都市です。

まず、筆者がEmbedded Systems Conference San



〔図1〕 Embedded Systems Conference San Franciscoの会場風景

San Francisco Moscone Centerの南ホールを使って行われた。ITバブルが崩壊したせい、昨年(2000年)の9月にSan Jose(シリコンバレー)で開催されたときより出展社や参加者の数がやや減ったという。

Francisco(図1)に参加した目的を述べます。筆者は、純国産の組み込みソフトウェア開発ツール(状態遷移ベースの組み込み向け上流CASEツール)を開発しているエンジニアです。筆者らが開発したツールが、米国においてどの程度受け入れられそうかを自分の目で確認するために、San Franciscoにやってきました。日本で支持を得たツールを米国にもちこんで、どのような評価が下されるのか、たいへん興味深く、楽しみなことでした。

## ●米国のPDA vs. 日本の携帯電話

筆者が興味をもったのが携帯型端末の分野です。この展示会で、どこへ行っても見かけたのがPalmやVisorなどのPDAです。ブースの展示やパネルの説明でもPDAを題材にしたものが数多く見受けられました。昼食を取りながら打ち合わせを行う人々の片手には、しっかりとPDAが握られています(米国人は手が大きいのでさらに小さく見える)。アドレス帳の管理、スケジューリング、メールの送受信、サーバ・パソコンとのデータベース連携…。PDAはビジネスマンのライフ・スタイルをさらに便利にしてくれることでしょう。

一方、携帯電話については、やはり日本製のヒューマン・インターフェースはすばらしい一言につきます(図2)。米国では多くの携帯電話がアナログであるのに対して、日本ではデジタル化で先行しています。iモードなどの普及により、液晶画面から得られる情報量は格段に増加しました(図3)。操作性についても問題なく、日本製の携帯電話は本当によく考えられていると思います(アイコンの使い方、入力の手引きには、家電製品の開発で培った日本人ならではの発想が生かされている)。スケジュール管理やメール、そしてインターネットへの接続。機能を考えると、もはや「携帯電話」というネーミン



〔図2〕日本製携帯電話の展示

アプリックスのJBlendのデモンストレーション。

グは適切とは思えません。そしてビジネスの分野で「コンテンツの競争」が進んでいるのも、日本の携帯電話の強みとなっているのではないのでしょうか？

### ●携帯電話の使い勝手では日本のほうが上

では、実際に米国において日本の携帯電話はウケルのでしょうか？それにはいくつかの意見があります。「米国人の手の大きさには小さ過ぎる」、「ある程度のずっしり感が好まれる」という意見もあり、手放して“Welcome”といった感じではありません。アイコンを駆使したヒューマン・インターフェースは、米国のエンジニアから見ると、「このオモチャ、けっこういかしてるぜ」という感じで、違う意図で受け取られてしまうようです。そうなる、日本で携帯電話の普及率が一番高い20代～30代には敬遠されてしまう危険がある、とのことでした。

しかし、かつて日本車が米国で受け入れられた理由を考えると、日本製の携帯電話が受け入れられる素地もあると考えます。低燃費、低価格、高性能、高品質であったため、日本製の車は世界に受け入れられました。日本の製造業の得意とするところは携帯電話にも受け継がれています。

米国で使用されている携帯電話は、お世辞にもきれいとは言えません。外観は角がとがっており持ちにくく、色は真っ黒で、材質はまさにプラスチックです。筆者が現地で使用した携帯電話は折りたたみ型なのですが、開こうとするとまちがってバッテリーを抜いてしまうことが多々ありました。

### ●Hi! How do you do?で始まるアピール

じつは今回の展示会で、筆者らが開発した製品をこっそり展示しました。本格的な米国でのプロモーションは2001年9月の「Embedded Systems Conference Boston」で行う予定なので、今回はその予行演習といったところです。米国Fujitsu Microelectronics社のブー



〔図3〕iアプリをPDAでエミュレーション

Java プログラムであるiアプリをカシオ計算機のPDA「CASSIOPEA」で動作させている。米国Insignia Solution社のブースにおけるイーバレーのデモンストレーション。

スの一部をお借りして、製品を展示したのですが、筆者にとっては貴重な体験であり、興奮した3日間でした。日本の展示会ではあたり前のように製品を展示して自分たちの製品をアピールしてきましたが、ここは海外。どうやってアピールしていけばいいのやら…。試行錯誤の末、たどりついた結論は単純なものでした。

“Hi! How do you do?”

米国のエンジニアにはこれで十分でした。後はとにかくしゃべりつづけることです(自分自身、英語は決してたんのうではないので、よくもこんなことをやっているなど思いつつ、筆者を米国に送り出してくれた上司に感謝！)。

筆者らの製品は組み込みソフトウェア開発支援ツールで、システムの動作をステート・マシンで設計し、その場でシミュレーションしたり、コードを生成するものです。さいわい米国のエンジニアにも注目してもらうことができ、「1回目の興業としてはまずまず」、といった感触でした。

近い将来、Embedded Systems Conferenceの会場に、さまざまな日本製の組み込み機器が展示されることを期待します。

### 参考URL

- 1) Embedded Systems Conferenceのホームページ,  
<http://www.embedded.com/esc/>

むらかみ・しんいちろう  
murakami@zipc.com  
キャッツ(株)

### ◆筆者プロフィール◆

村上晋一郎。1991年にキャッツ入社後、通信プロトコル・ソフトウェアを状態遷移表で設計。以後、状態遷移表を中核とするCASEツール「ZIPC」の開発に従事。現在はZIPCや、その他のさまざまなツールを開発したり、現場が必要とするツールの企画を行っている。最近、子供が生まれたが、相手をする時間が少ないのが悩みの種。ZIPCに関するURLは「<http://www.zipc.com/>」。